島守小

主体的に学び合う子どもの育成

（３年計画の３年次）

校長　日山　寿康

１　研究主題について

昨年度は、研究主題を「主体的に学び合う子どもの育成」として研究実践を通して研究を進め、次のような成果が得られた。

① 導入時や終末時などの間接指導にあたる時間を中心に、どの学年でも学習リーダーの指示のもと、一人一台端末を利用する授業に取り組んできた。その結果、一人一人のペースに合わせて習熟の時間を確保することにつながり、基礎・基本の定着が図られた。

② 振り返る場面で、授業中の児童の様子や習熟の時間をもとに振り返る視点を与えて書かせるようにした。その結果、わかったこと、わからなかったことだけではなく、本時の学習を理由づけながら振り返るようになり、次の学習へ向けて意欲を高める児童が見られるようになった。

一方、課題として次のようなことが挙げられた。

① 複式の授業において個人差に対応した学習指導を進めるために、学習リーダー以外の児童にも見通しをもって授業に取り組ませるなど、リーダーの育成とともにリーダー以外の児童の学び方についても共通理解し、取り組んでいく必要がある。

② 深い学びに向けて、児童一人一人の振り返りの内容を充実させるために、つまずきの原因や、見方、考え方の違いを共有していく場が求められる。そのために、複式であっても児童の考えの変化に気づけるような同時間接指導の導入など授業展開の工夫を図る必要がある。

そこで、今年度は昨年度の研究を受け、主体的な学びをより深い次の学びにつなげていくための授業展開の工夫やリーダー学習の進め方、振り返りの生かし方について研究していく。昨年度、間接指導時における学習の進め方や振り返りの観点を「島守スタンダード」という形にまとめた。今年度はこの「島守スタンダード」に則り、発達段階に応じて、単式、複式どちらの学級形態であっても児童が主体的に学習を進める方法を身に付けさせていく。そして、児童が主体的に学習を進めたり、振り返りをしたりする中で教師は考えのよさやつまずきのポイントなどを見とどり､授業展開に組み込んでいく。こうすることで、子どもの学習に対する主体性が育まれると考える。しかし、児童が主体的に学びに取り組んでいくためには、基礎・基本の学力が必要不可欠である。そこで、今年度も一人一台端末を活用し、それぞれの児童の習熟に合わせた確かな学力の定着を目指す。

以上のことから、本主題を設定した。

２　研究のねらい

学びを深め、次の学びへと意欲を高めるとともに、基礎・基本を確実に定着させる学習指導のあり方を算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

学びを深め、次の学びへと意欲を高める「島守スタンダード」に則った効果的な学習の進め方や振り返りの仕方を身に付けさせ、基礎・基本の確実な定着を図る一人一台端末の活用をすることにより、主体的に学び合う子どもを育成することができる。

４　研究内容

(1) 個に応じた基礎・基本の確実な定着を図る学習指導のあり方

ア　学習リーダー、フォロワーの育成

イ　一人一台端末の活用

(2) 学びを深め、次の学びへの意欲を高めるための手立ての工夫
ア　同時間接指導を取り入れた授業展開
イ　問題解決的な学習を進めるための教師のはたらきかけ
ウ　振り返りの内容の充実と活用

5　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

月	日	授業の概要
５	２７	第１回授業研究 第３・４学年　授業者：大山　美江 題材名　３学年『１０倍した数、１０でわった数』　４学年『億と兆』
７	１３	第２回授業研究 第２学年　授業者：佐々木　耕造 題材名　２学年『１００をこえる数　１０がいくつ』
１０	５	小学校教育研究会　複式教育研究会発表（第３回授業研究） 第３・４学年　授業者：大山　美江 題材名　３学年『何倍でしょう』４学年『面積の求め方のくふう』 第５・６学年　授業者：田名部　純一 題材名　５学年『三角形の面積』６学年『比を使った問題～比の一方の量を求める～』
１１	１６	第４回授業研究 第１学年　授業者：須藤　有祐美 題材名　１学年『ひきざん（２）』

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
５	２５	交通安全講話 講師　島守駐在所　所長　若林　太一様
６	８	特別活動に関する研修 講師　島守小学校教頭　髙橋　裕介先生
８	３１	一人一台端末活用研修 講師　総合教育センター主任指導主事　石井　一二三先生

6　研究の成果

(1) ３年間の研究成果を「島守スタンダード」にまとめ、振り返りの仕方や授業の進め方について共通理解を図り全校で取り組んだ結果、複式学級、単式学級どちらでも発達段階に応じて学習リーダーを全員が経験することができた。また、振り返りを記入することで自分の学びを客観的に見ようとする習慣が定着してきた。

(2) 同時間接指導を取り入れたことにより、児童が自力で課題に向き合う時間を確保するとともに、教師が子どものつまずきに気づいて個別指導にあたることができたため、どの児童も意欲をもって次の練り合いの活動に関わっていくことができた。

7　今後の課題

(1) 課題設定の場面だけではなく、児童が終末時まで問題解決に向けて深く考えていくことができるような手立てや発問、板書の工夫を図る必要がある。

(2) 振り返りを書くことはできるようになっているが、その内容に個人差が出たり、次の授業に生かし切れていなかったりする側面が見られるようになってきた。内容の充実をさらに図るためにも、相手の考えをしっかりと聞き、その考えを解釈し自分の考えと比べることで、相手と自分との相違点や類似点を考えたり、自分の考えの変容を意識したりできるような授業展開の工夫が必要である。

（記入者　須藤　有祐美）